

真夜中の天使

上

栗本薫



真夜中の天使 上

栗本薫

文藝春秋



■著者略歴

昭和28年2月13日、東京に生れる。栗本薫
のほかに、中島梓のペンネームも持つ。早
稲田大学文学部文芸科卒業。

「文学の輪郭」(筆名・中島梓)で第20回群
像新人文文学賞受賞(評論部門)。

「ぼくらの時代」(筆名・栗本薫)で第24回
江戸川乱歩賞受賞。

© Kaoru Kurimoto, 1979

真夜中の天使 上

980
円

昭和五十四年九月五日 第一刷

著者 栗本^{いもと}薫^{かおる}

発行者 桧原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話〇三二六五一一二二一

印刷 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

真夜中の天使

上

——この本の最初の読者であるOとYに



黒いベントがすべりこんできて、RVCテレビ局の入口にびたりと横づけになると、例によってわあっと少女たちがむらがつてきた。

「良ちゃん」

「ジョニー」

黄色い声をあげる少女たちの年齢は、十五、六から七、八というところか。苛々して彼女たちをかきわけて近寄りながら滝はふと、どうしてスターに熱狂してむらがり、テレビ局の前で辛抱づよく待ちおせているような娘たちは例外なく不器量なんだろうかと考えた。

だが少女たちを三人の付人がおしのけて、道をあけると声をからしているあいだにベントのドアをあけた滝の顔は、もう職業的な懸念と叱責のほかに何の表情も示してはいなかった。サングラスの下で、目が鋭い光を帯びている。ベントからおりて、すんなりした姿をあらわした良は、少女たちの悲鳴のような嬌声と殺到には馴れっこで機械的な愛想笑いをむけたが、滝の苛立ちと叱責の目は無視して、遅刻の詫びごとひとつ云うでもなかった。

「先生」

甘えるように呼ぶ。運転席からとびおりてまわってきた

のは、作曲家の結城修二である。長身に、黒の三つ揃をタンディに着こなした、口髭のよく似合う男だ。滝に微笑をみせて、バック・シートからとった毛皮のコートをふわりと良の肩にまわしてやるバクくさいしぐさが、ひどく板についていた。車はAライセンス・クラス、趣味はヨット、ジャズ・ピアノの名手としても知られ、渋い美貌でなまじっかな歌手より人気のあるといわれるヒットソング・メーカーだ。いまヒットチャートのトップを独走中の『ラヴ・シャッフル』を含めて、これで三曲、良の歌をつくり、そのいづれもヒットしていた。彼の精悍な笑顔を見た瞬間に、滝の目の中に何か異様な光がかすめたが、すぐに愛想よく結城に送ってもらった礼を云った。良にむき直る。

「ジョニー、急いで。5スタだよ、リハの時間なくなっちゃうぜ。ぶっつけでいいんらかまわんけど」

「わかってるよ」

良は素晴らしい銀色の毛皮のコートを、袖をとおさずにはっすりした手で袴をおさえながらそっけなく云いかえし、何か内緒の冗談でも楽しむように結城を見上げた。結城が包みこむようなまなざしをかえす。いかにも傍若無人な、この一対のふり滾す何かがふいに滝の目をそらさせた。滝ですら、良の肩をなにげないようすでおさええている、良より頭ひとつ高いダンディな作曲家と、その守護神によりそわれて自らの美しさを誇っているような美少年との絵のような立ち姿の中に、傲慢で挑戦的な禁色の恋人たちを見ぬ

わけにはいかない。良は、羽織ったコートの下は白いシルクのブラウスとジーンズだけだった。白い手に幅の広い膨金のと、重たそうな緑色の石のと、ふたつの指輪がはまっている。額やきゃしゃな首筋にきれいな渦をまいている、褐色の髪の毛のあいだから、右耳にだけしているピアスがちらりときらめく。まるで化粧をしたように、唇が紅く、頬になまめいた血の色がさし、まぶたが濡れたように青みがかったのだが、化粧のせいなどでないことは、滝にはわかっていた。

（今まで一緒にいたんだらう）

彼の顔は身についたマネージャー族の、したたかで底の知れぬ無表情を示かしてはいない。しかし、彼の目はともすれば彼を裏切り、おさえた心のうちを暴露してしまおうとする。それゆえに彼はサングラスをかけているのだとも云えた。

ファンの少女たち、付人たち、そして結城もまた、いつものことだが良がそこにあらわれた瞬間の戦慄に似た讃仰をあらわにして、良だけを見つめている。どこにしようとして、そこをかれの聖域、かれの足もとにひざまづく崇拜者たちの祭壇と化させずにはおかない、良の魔性ともいえるべき磁力の効果はいつもながら滝にわくわくするほどスリリングな、そして同時に鋭いたみに似た気持を味わわせた。少女たちは口を半びらきに、宗教的なまでの恍惚の表情で、大理石の少年像のような、若いアイドル・スターを見つめ

ていた。そして、結城の目には、さながら良のほっそりした、優美な容姿を、呑みこみ、包みこんでしまいたいような、いつくしみ、灼きつくし、愛撫する表情がある。

「ジョニー、急いでよ」

滝の声は自然にけわしくなっていた。付人たちが、黄色い声と一緒に突きだされる、サインブックや贈り物から護衛して、良をスタジオに入らせる。結城はベンツの傍に立って、それを見送った。

「車おいたら、ちよつとのぞきにいくよ」

背中に声をかける。良がふりかえって、ちらりと笑ってみせる。結城はベンツに乗りこみ、ファンの人垣はくずれて、わあっとスタジオへ入りこもうと再び無駄な突進をしたが、はばまれると未練たらたらで散った。このまま、このあたりにうろついて、こんどは良の出でくるときを待とうというのだ。何十人と限って入れるスタジオにはいる恩恵を、少し遅く来たりしてつかみそこねた連中である。寒さも、夜のふけることも、むなししい時間も、逢瀬と呼ぶすらはかないその報酬も、彼女らにとっては、良の夢見るような一瞥、そのほっそりした美しいすがたをまぢかく見られるかもしれないこと、特別に運がよくてそのコートの端にふれることだってできるかもしれないという希望の前では苦にもならないのだった。

ああいう娘たちが一番幸せなのかもしれない、と滝は考えていた。結城と別れると、いっぺんに良は不機嫌に、つ

まらなそうになった。それをせきたててスタジオオへおしこみ、あたふたとスタッフに詫びごとをいい、もう時間がないうから、すぐメイクしてくれ、とどやされて急いで楽屋へ連れていく。コートをぬがせ、もう一度こんな遅刻をしたからこれまでどおりおれが朝から晩までくっついてまわるからな、とどうせ聞き流しを承知でがみがみ云った。

「四六時中見張られてるなんてまっぴらだ、ちょっとは自由にさせてくれて云ったのはおまえなんだぜ。それならそれでちゃんと責任ある行動をしてくれなくちゃ困るじゃないか」

「わかってるったら、うるさいなあ、台本頭に入りやしないじゃない」

「先生どこにいたんだ、良」

滝は付人にきこえぬよう、低めた声で、しかし鋭く云った。もとより返事を期待してはいない。鏡の中で、良の目が冷やかになった。

あんたに何の関係があるのか、と云っている目だ。結城はこの淋しがりで甘えたがりの少年に、ただやさしくしてやって、遊びにつれていったり、慰めてやったりしていいばいいのだから、何の苦勞もあるまい。しかし滝はマネージャーとして、がみがみ怒鳴りたて、いやなことをさせ、追いまくって練習だ、巡業だ、時間だとわめきたてる立場なのだ。おれは割をくっているんだと滝は唇をかんだ。

鏡の前で台本とアレンジ譜を見比べている良の顔に、メ

イク係がうすくドーランをのばしてゆく。うすく頬紅をはき、口紅をつけ、そしてまぶたに少し銀粉のまぜてあるシヤドウをさしてゆくと、大きな鏡の中にうつった顔は、みるみる少女のようななまめかしさを増してゆく。きれいだ、と滝は、口惜しくともいつもの苦しいほどの感嘆に胸をしめつけられぬわけにはいかない。

あまりたちのよくない性格だと思っても、この我儘な、残酷な、いい気な小僧めと心中憤怒することがあっても、良の美しさ、という厳然たる呪縛の前で、滝は時にどんなに憎まれ役の自分の立場をのろい、恨み、やさしくだともう甘やかしてやりたい気持をおさえつけねばならぬかわからない。神話のナルシスを思わせる美貌への讃美はすでに云いつくされたことだが、それでもまだまだ充分ではない、と滝は思っていた。

細おもての女顔はぬけるように白く、幼児のようになめらかな頬をしている。挑戦的な弓形を描いて、きれいな顔に一抹の皮肉そうな翳を与えている眉、茶色の冷たい、どこか夢見ているような甘さをかくした目、きわだった二重瞼で、何も塗らなくてもその瞼はいつも青みがかってみえる。

うっとうしいほど長い睫毛、細い鼻梁、くつきりと上唇がくぼみをつくり、下唇はひどく色っぽくしゃくれてふくらんでいる拗ねたような口もとに至るまで、すべてが繊細な線でつくられたアラバスターの彫刻のようだった。

それに生命をあたえているのは、そのととのつた顔をひらめくように変えてみせる、独特な表情の鮮烈さだ。良のどの表情も、誰に教えられたわけでもない生来の強烈なあざやかさを持っている。とりわけ、眉と瞼と睫毛が自在にこちらの胸を苦しくさせるような色っぽい表情を描き出してみせた。

だがいま、それは不機嫌そうにしかめられ、とげとげしい苛立ちを示している。付人が手をかそうとするのを靉性に首をふって立ちあがり、するりとシルクのブラウスをぬぎすてて、苛立たしように、さしだされる、持ってきたぶんのステージ衣装をみな氣にくわぬようすでかぶりをふりつづけた。

衣装のこのみにはとりわけて氣むずかしく、どの付人もまずこれでたっぷり泣かされるのだ。裸の胸はなめらかに薄くて、ほの紅い双つの乳首と三角形を描く位置に細い金鎖でつるした何かの牙のペンダントが下がっていた。

付人の隆はまだ新しい。なんとなく、どぎまぎしているようである。同性の裸身で目のやり場に困る、などというのは、良でなかったらありえないだろう。しかし良のからだには、なにか、ごく未発達なのにひどくエロティックなものを感じさせる美少女の裸身のようなものが漂っていた。興福寺の阿修羅だね、と結城が云っていたことがある。

いたいたしいくらい、ほっそりときゃしゃな、ほとんど体毛のない裸身だが、骨ほそでなめらかな肉におおわれ、し

なやかなからだつきなので、痩せすぎという感じはしなかった。ひきしまって、野生の美しい鹿かなにかのようだ。「あのあつちの黒いのもってきといてって云ったのに。十月につくったやつ」

苛々と良は云った。滝はしなやかな裸身をにらむように見つめながら、覺えず、このからだが先刻まで、あの結城の逞しい裸形の下に組みしかれてのたうっていたのだ、と妖しい思いにとらわれていた。着痩せするたちの結城が、スポーツマンらしいみごとな筋肉質のからだを誇っていることを、前に誘われて良についていった彼のヨットで水着の姿を見て、滝は知っている。目のまえの若者の少女のような肢体との組みあわせは、滝の頭をかつと熱くさせる、サディスティックな構図を秘めていた。どんな表情で良は結城に抱かれるのか、どんな愛撫の手順がふたりの秘密の時間に決まっているのか、と考える。それは、身肉に食いつてくる嫉妬でもあった。なぜなら、滝は——男に組みしかれ、唇をかみしめて、顔を汗にぬらしながら苦痛に耐える良の表情を、——抱きよせられるとき、哀願するように、弱々しくあいての胸を押しつけようとする、あいてを逆上させるような可憐なしぐさを、彼自身の腕の中でかつて知っていたからである。だがそれはあくまで、かつて、にすぎなかった。いまの彼を競争者とは、結城も思わぬし、第一滝自身が考えることができない。それはなにも彼が望んで良をはなれたのではない。もしできるなら、今すぐに

でも結城にとってかわりたいと激しく願うだろう。

だが彼はスター、今西良のマネージャーなのだ。たとえ、時として目のまえに挑発するようにさらされている良の魅力や美しさに拷問されるような苦しさを感じたとしても、彼がみがきあげ、売っている良のすべての魅力は、彼自身のためのものではない。

「早くしろよ。風邪をひくぞ」

胸苦しさにたえかねて、彼は口を出した。

「こっちの黒でいいじゃないか。つくったばかりだろ」

「だって——云ったじゃない。これ気にいらなくて。これだと首が太く見えるんだもの」

「こんな細い首がか？」

滝は笑った。

「いいからこれ着てみろよ。松チャンから黒着ろって、ご指定なんだから」

不承不承、良は付人のわたす衣装にすべりこんでいる。

それは黒の張りのある生地をジャンプ・スーツ型に仕立て、一面にスパンコールがぬいつけてあった。胸はウエストまでV型にあいていて、そこを黒の編み紐でしめ、ウイング・カラーにかこまれた咽喉に金のネックレスをまきつけ、七分袖から出た細い手首には重たい金のプレスレットをつけた。指輪にピアス。なめらかな真白な胸が、紐にしめつけられて、ぞくりとするほどエロティックなものを感ぜさせる。

「ジョニー、このペンダント、とらなきゃダメだよ」

「あ、これ、いいんだ」

「ダメだよ、このネックレスするんだから。はずしてやるよ」

うしろにまわり、ペンダントをはずしてやりながらのぞきこむ、鏡の中から、妖しい美しい生き物が見つめかえしている。昏い目だ。冷たく、無感動な表情が、黒いしなやかな猫を思わせる。

黒いドレス、アイ・シャドウ、ありったけの装身具、これでなかったら男どころかどんな女でさえ着こなすことはできない、ファンキーなまぶしい装いにつつまれて、良はこの世にふたりとはいえない、男でも女でもない、ふしぎな美の化身ともうつる。昏いかがやかしい生物。

サロメだ、いつも滝は思うのだ。それとも、バビロンの、マスカラで顔をくまどった大淫婦、月の女神アシュタルテー、金の冠とかずら、細い少女のようなからだを金で飾ったトゥット・アंक・アモン、或は顔唐期ローマの太陽皇帝、ブリアポスの神殿でおどり、すいかずらをからだにまきつけ、十八歳で叛乱軍の刃にかかったヘリオガヴァルス、そうした、《見られるため》にあり、ひとびとの驚嘆と讚美によつていよいよ美しく光をはなち磨かれてゆく、彼岸で可憐ななけば狂った、日常の時間の耐え得ぬようなふてぶてしい白い生き物。その美に目をひかれるものすべてに、ありえぬような禁断の妖美な世界の夢を見させる魔

法使い、鍊金術師。日本でどのアイドル・スターよりも増して気狂いじみたグルービーを持っている、《ジョニー》今西良。

なんというやつだろう、と滝は思い、鏡台に、外したベンドントをおこうとすると、金のプレスレットにまるでいましめられているような、ほっそりした手がのびてすばやくそれをひったくった。

「お大事なんだな。先生のプレゼントかい」

滝はことばを呑みこもうとしたが、それはたまりかねたように勝手に口から出た。付人の隆が目をそらす。

良はじろりと滝を鏡の中で見あげ、返事もせずに、プレスレットの上からその細い鎖を手首にまきつけ、おちないようにとめると、支度をおえて立ちあがった。

「これでいい？」

「いいよ」

「首太くなんて見えませんよ。とつても細いですよ」

付人の隆が保証した。きゃしゃな首が、黒いシャツ・カラーと長いカールした髪、ハリウッドの女優のような重たい金のネックレスにつつまれている。良は眉をよせて鏡の中を見つめ、首をかしげ、ほほえみかけてみた。

「やっぱり何だか気に入らないよ、これ」

「きれいだよ」

「ねえ、こんど黒でね、ビニール・レザーかなんかでもうひとつつくってくれないかな。また北川のママに頼んどい

てよ——ジャンプ・スーツで、赤いネッカチーフまくようなのがいい」

「それまだ二、三回つか着てないじゃないか。それに、また、黒？」

「いちばん、似合うでしょう、黒が」

こいつめ、と滝は思った。心理や感情の特性にかなり驕慢な美少女のそのようなものが混りこんでいる良は、ぬけるように白い肌を、黒い衣装につんだときの効果をよく知っているし、それに、滝が黒を着た良をいちばん好きなのもよく心得ているのだ。

「考えとくよ。さあ、急いで」

「今西さん、お願いします」

本番を告げにきたアシスタント・ディレクターが、はつとしたように、ふりかえる良を見つめ、まぶしそうな表情になり、それからあわてて引っこんだ。良の口もとにほのかな、得意の微笑がほころびた。

「さあ、行った行った」

「待って、台本みるから」

良の目がちらちらと入口の方を見ている。結城を待っているのが滝にはわかる。ちくりと再び滝の心の最も深いところで疼くものがある。タイミングよくそこへ結城が入ってきた。ほかの出演者が次々に挨拶してステージの方へ出てゆくのは目もくれず、良を見、その目が瞬間に灼くような光を出した。

「きれいだね、ジョニー」

咽喉の奥で唸るように云う。その目で、このきらびやかなきらめく闇を身にまとうたジョニーと、それをひきはがし、その白いからだを押し伏せ、苦痛と、やがて快楽とに呻き声をたてさせるときのかれひとりのものである良とをひきくらべているのだろうか。滝は勘ぐった。良の方はそれで満足したのだろう。目に勝利の誇らしさが輝き、結城の讚美を当然のことと受けとめた。

「急いで急いで」

時計をみて滝は怒鳴った。A Dがまた顔を出した。

「今西さん」

「はい、済みません」

良は結城に微笑をみせて、あわただしくステージへ出ていった。むろん滝の方など目もくれない。滝は隆たちが楽屋のあと片づけをはじめのへ指図しておいて、結城のあとにつづいてスタジオにすべりこみ、良を一番よく見られる場所をさがした。まんなかに、オケをバックに階段式のステージをしつらえ、両側にヒナ段を組んでファンを並べてある、このごろはやりの形式だ。

あたりが暗くなり、ON・AIRのランプがつき、しきりにチューニングを気にしていたギターもようやく静まって、オーブニングだ。

パンマスがおもむろに手をふりあげる。耳馴れたヒット曲の前奏がはじまるとカメラがパンして、階段式ステージ

の上にぱっとライトがついた。

四方から照らし出された光の中心に、良はこころもち首を垂れて立っていた。前奏のおわると同時にゆっくりマイクのコードをさばいて歌い出しながら階段をおりてきて、そのほほえみをうかべた顔を3カメラがクローズ・アップでとらえる。

甘い、いくぶんかすれた、よく伸びる声が静まりかえったスタジオを埋めつくしていった。独特の、すぐれて間のいい、舞うような美しささえ感じさせる、ハンド・アクション。

すぐに、世界は良のものだった。耳にその声を追いもとめ、目は良だけを見ている。光の中で、良は美しく、不吉なほどの魔力をはらんで急にそのきゃしゃなからだが一とまわり大きくなったようだった。

と、いって、滝は、決して良をはじめから受けつけない層というのがあって、しかも相当に根強いことを忘れはしない。それはむしろ自然なことともいえた。それはちょうど高価なフォア・グラやキャヴィアを賞味しうる人々ばかりではないのと同じことだ。

滝は夢にも、正木きよしのような、「赤ちゃんからお婆ちゃんまで」式の健全路線を良のために望んでなどいなかった。それは良の持味と魅力を失わせるのにひどい。

そしてあのきちがいみたいな奴だの女みたいなのやつだと良を嫌う層のたしかにある一方で、ジョニー？ 悪くな

いとか、なかなかいいとか、そのていどの関心でとどまってしまう人々があまりいないというのもたしかなのだ。

受けつけることのできる人々にとっては、良は異常に強烈な麻薬である。それは良のボートレートを抱いて自殺した少女や、リサイタルで失神したファン、などという良をとりまく神話が証明している。

良には、無関心でいることができない。おだやかなご家庭の団欒には良はふさわしくない。グルービーと化すか、激しく反撥するか、どちらかだけだ。こいつを愛してしまつたら致命的なのだ、という思いをこんなにまぎまぎと実感させる存在もないだろうと滝は思った。なにかというミッド・ジャガーにたとえられる良である。

一曲歌いおわるや、スタジオを埋めたファンたちが拍手と嬌声をあげせた。

「ジョニー」

「ジョニー」

司会者がにこやかにあらわれて、何やら齒のうくようなお世辞を云いはじめる。良はつまらなそうに、口もとだけの笑いをみせて、生ま返事をする。マイクをもちかえて、右手を髪につっこむと、ちかりといくつもさした指輪が光る。そしてオーケストラがまたはじまり、また、歌。

——それは滝にとつても手馴れた、夜ごとの神話、馴染んだ祭祀にはかならない。良はくつろいで、自信にみち、きれいだつた。世界を魅了し掌握するために、光の中に立

ち、そしてそうしているものの確信。

滝はとなりで結城修二が低い無意識の嘆息をもらすのをきいた。彼の顔は緊張し、その目は良を、ひたすら良の一挙手一投足を追っている。それは呪縛され、魂をこの魔性の天使に奪われたものの覚えず洩らした心中の苦悶、灼けつくような、同時に戦慄するような陶酔にみちた苦悶の声であるともいえた。

滝は歌う良から目をはなし、鋭い目で結城をうかがい見た。結城から気づかれていないと安心している一瞬、サングラスと闇にまぎれた彼の顔から、有能で人あたりのよいマネージャーの穏和な仮面は、あとかたもなく剝けおち、彼の顔はおさえきれぬ激情に、殺気にも似たはりつめた炎を放っていた。

それはまぎれもない、流行歌手ジョニーの敏腕なマネージャー——滝チャン——ではない、かつて新人発掘の神様といわれ、その辣腕と冷酷非情とで、伝説にまで高まった、一種かんばしい悪名に包まれていた滝俊介の本当の顔である。

芸能界の最大勢力、タレント王国といわれ膨大な版図を誇る尾崎プロダクションの、デューク尾崎の右腕といわれた男だ。

花村ミミ、中山ルナ、桜木曜子らのスターを育て、その目のたしかさと売りのうまさ尾崎プロをここまで発展させたといわれた。一見やさ男のように見えるが、鋼のきら

めきをかくした目と、どうかした拍子の怖いほどの凄みを
みせる表情が、この男の並大抵でないしたたかさを教える。

滝にさからって葬られたタレントやプロデューサーもま
た三、四人ではきかない。その気になれば明日からでも独
立して自分のプロダクションを持てる、いや、その手がけ
たスターたちが全員滝についたとしたら、さしもの尾崎ブ
ロをつぶすことだってできるといわれた。

その滝俊介が、以後一切のプロデュース活動をやめて、
今西良の専属マネージャーになると云い出したとき、幕う
ちの誰もが耳を疑った。マネージャーといえは要するに雑
用屋であり、付人のまどめ役、四方八方にべこべこする役、
下手をしたら楽屋掃除にスキャンダルのしりぬぐいと、こ
れまでの滝の地位とはくらべものにならぬ待遇だったから
だ。

良はデビュー曲『裏切りのテーマ』が大賞を受けるとい
うはじめから栄光と伝説に包まれたスタートをきって、ま
たたくまにスターダムにのしあがったとは云いながら、そ
のときはまだ、最初がよすぎたという危惧で、どこまでつ
づくかと一発屋視するものも多かった。デューク社長の親
友だとはいえ、いったんマネージャーまでさがってから、
良がうまくゆかなかったときそれではと、おいそれとプロ
デューサーにもどるといいうのもできない相談である。

「わかってるのかい、滝ちゃん、お前さん、自分の云っ
てること」

「わかってますよ、社長」

「お前さんの、どこのプロからもうらやましがられてる地
盤だっていっぺん手ばなしたらアウチなんだぜ」

「ちゃんと、適当なの——赤木か村田にでもわけてやる手
筈にしますよ。よそにや渡しやしませんよ」

「それにしたって、何も全面的に手をひかなくなつて——
兼業でいいじゃないの。さもなきや、こりゃ、おれとお前
さんだから馬鹿を承知で云うんだが、もう前からいわれて
るんだ、独立して事務所を持ったらどうなの。ジョニーひ
とりだって、ちゃんと商売になるじゃないか」

「冗談いっちゃ困る。あんたが、良を手放すと思うかね、
デューク」

「そりゃまあ——しかし滝ちゃんならいくらだって……」
「もう、いいんですよ」

滝はおだやかな微笑をみせた。

「もう決めたことだ。あんたは笑うかもしれないけれどね、
デューク、おれは良にとことん賭けてみますよ。フロック
だなんていってゐる奴ら——もう二年したら、見ててごらん、
良は押しも押されもしないトップ・スターにしてみせるか
ら。むろん、ただのマネーシのつもりはない、いわば音楽
からコスチュームから、売り方、仕事の選び方、ショーの
構成まで、これまであんまり例のないかたちだが、総合マ
ネージメントってつもりでやらして貰いますよ。まあ見て
て下さいよ。おれが変わるわけじゃない——名前がかわろ

うと、対象をひとりにしぼろうと、おれの流儀は変わらな
い。男は、一生にいつべん、生命をかけて作品として完成
させてみたい素材にぶつかるんじゃないですかね」

「そこまで、ジョニーに惚れたのか」

「惚れましたね」

デュークは声もなくうなり、そして折れた。そして、こ
れまでに例のない——せいぜいブライアン・エプスタイン
ぐらいの——徹底的なマネージメントを滝がひとりひき
うけることを認めてくれた。デュークはそれですんだが、
事情通や週刊誌すずめには、どこへいっても、いぶかしそ
うな顔で、なんでまたふいに、ときかれた。

その口調には、何を好きこのんで雑用屋になりさがるの
か、というほのめかしがこもっていたが、滝は例の心底を
一切のぞかせないおだやかな微笑をうかべて、すべての疑
惑やかんぐりやおどろきをやりすごした。

そしてやがて滝の神話も忘れ去られてもう二年になろう
としている。そのあいだに滝の敏腕はいよいよ深く静かに
発揮されて、デビュー後三年にしてすでにトップ・スター
今西良の人氣は不動のものになっていたし、それがますま
す増してゆくばかりだろうということを疑うものはもう誰
もいなかった。

大賞曲『裏切りのテーマ』の五カ月連続ベストテン内、
三カ月連続ベストワン独走、三曲続けてのミリオン・セラ
ー、プレミアのついたボスター、東京ブラザー・リサイタル

で三万人動員の大記録、などと、すでに輝かしい神話にこ
とかかない、良のめくるめくような、神秘的な、スキャン
ダルにもまたことかかない華麗な栄光のうしろに、ぶきみ
な、滝俊介健在のあかしをみてとるものも、おそらくあつ
たことだろう。

滝はスキャンダルを、全部はもみ消そうとはしなかった。
あるときはこちらから仲のいい芸能記者にネタを提供して
センセーショナルに書かせた。利用できるものならば、犯
罪ですら滝は利用しただろう。

そして、彼の思いどおり、スキャンダルもまた、ただ
『ジョニー』という甘い名前のひびきに、妖しい神秘的な
かがやきを添えたにすぎなかった。

おれの野望は、日本にほんもののスーパースターをこの
手で生み出すことだよ、ノムさん、と滝は、『今西良の暗
い過去——そして今、訣別の涙を昨日に！』といういいか
げんなタイコ叩きをしてもらった、元『週刊トップス』の
記者で今はフリーの野々村に云ったことがある。それは何
のことはない、良がジャズ喫茶にごろごろしているような
ちよっとぐれた少年だった、というだけの記事なのだが、
それで『週刊トップス』の売りあげは百五十万台まではね
あがったのだ。

「滝さんは、アラン・ドロンにお熱だったっけね」

野々村は笑いながら云った。

「たしかに、似たところがあるな、良ちゃんは、ドロンと

さ」

「まだまだ、だな」

しかしその、そのへんにごろごろしている並のスターでない、《スーパースター》へ、そしてやがては世界へ、という滝の野望は、たしかに一步一步押しに進んでいる。美しい悪魔、魔性の天使、どんなスキャンダルや乱行、それどころか、殺人事件の黒い影にすらそこなわれぬ、いや、そのような暗いかげりすらもそのあやしい魅力にかえてしまい、女だけでなく男たちをも恍惚とした麻薬の陶醉境、この世ならぬ白日夢にさそいこんでやまない、そんな存在、スーパースター良になら、できる、と滝は思っているし、そのためにすべてを賭けて悔いはない。

そして、そうであるかぎり——彼だけがその夢を実現させうると知っているあいだは、良は彼を憎みながらもはなれ去ることは決してあるまい。

（良は、おれを憎んでいる）

それもまた滝は知っていた。それどころか、

（あるいはそうしむけたのはおれ自身かもしれない）

滝はそう考えている。結城とのことがあってから、それは表面化している。

結城——滝は、暗い火をひそめた目を結城の端正な横顔にむけた。

良が結城と親しくなったのは、五枚目のシングル盤『明日なき恋』の作曲がすったもんだの末山下国夫から結城に

かわり、そしてそれがミリオン・セラーになって次の『甘い関係』そしていまヒット中の『ラブ・シヤッフル』と、三曲結城修二—中村滋コンビがつづいたからである。

次の曲も結城が書くのがすでに予定されている。まだ当分つづくだろう、と滝は思っていた。まして、すでに暮うちなら誰でも知っているほどに、彼が良に首ったけにのせきっているのであってみれば。

（これで半年か？ もうそんなになるかな——良としては、つづく方だな）

滝は良に関するかぎりすべてを知っている、という自負がある。その気になれば一夜かぎりの関係を含めて良の数多い情人を、男も女もすべて数えあげることできるだろう。

その中の何人かは公然のスキャンダルとして書きたてられた。結城のことも、何もことごとく書きたてられるのを待たずとも、よほどの盲目か鈍感でないかぎり、どこへゆくにも一緒に、守るようによりそって立つ彼と良とを見ればひと目でわかるのだ。

だがそれは良を傷つけはしない。良は年上の頼もしい立派な男に、兄か、父のように守られ、その愛を我儘にむさぼっているのがいちばんふさわしい。

或は美しい、いくぶん倦怠の皺がその美貌に忍びこむようになっただけの年上の女性か——年相応の初心な少女は最も良に似つかわしくないし、ふしぎと一度も、そうし

た噂されてもおかしくないようなあいてとは、良はスキヤンダルになったことがない。

（公然になったのは大女優の高見沢慶子と、白井みゆきと——あれは二十一上だったな——それに映画スターの、佐伯真一と——）

決して良は傷つかないのだ、と滝は思った。どんなに素行が荒れても、良の美しい顔はふしぎなくらい、手をふれがたい純潔な透明さを失わない。若さのため、とばかり云うことはできないだろう。

仮に現在の恋人である、その美男の瀟洒な作曲家を良と並べ、一対として眺めてみても、それはただローマの少年皇帝と寵臣との一対を見るような、美しい憧憬と驚嘆をしか呼びささない。

魔物め、と滝は光の中に、すべての息づかいさえひそめた人々の陶酔の目に支えられて歌う良を見やりながら思った。美しい、許しがたい、ジョニー、おれの作品、と考える。この美しいけれども不道德な生き物を見出し、磨きあげ、つくり出したのはおれだ。だから、ジョニーはおれのもののなのだ。

誰がどのように良を恋し、愛し、そのからだを通りすぎようとも、決してその絆だけはおれから奪うこともできない。光の中の良、彼を憎んでいる、まばゆく、なまめかし、恋の歌と別れとをうたう、少しかすれた声、セクシーなアクション、リズムにからだの中からふり動かされている

るようなその動き。

おれがつくったのだ、と滝は思い、そして疼くような誇らしさと胸にくいこむ痛みでもって、三年前を、良との出会いを思った。

*

*

（あの日から、すべてが始まったのだ）

ひとの生には、そうした、あとでふりかえってひそかに宿命の見えざる手に驚嘆するような瞬間がいくつかは用意されているものかもしれない。

おれと会った日のことを、良は覚えているだろうか、思い出すことはあるのだろうか、と滝は時にいぶかしむことがある。

ほとんど家に帰らず——良の家庭は複雑で、早くに父と死に別れ、病気の妹や二度目の父親がごたごたばかり起していた。良がスターになってまもなく母が死んでしまっただけは、事実上良は家庭というものを知らぬ身の上になっている。しかしもともと肉親の情のうすいちでもあったのだろう。親の方も心配するでもない、というぐれぬ方が不思議な育ちで、喫茶店にたむろしては学校をさぼり、喫茶店がスナックになり、音楽喫茶にかわり、高校もただ籍をおいただけで朝から晩まで音楽喫茶でいわる「ごろまき」連中に妙に可愛がられて、ギターをおそわたりして